

## 小説 六月二十日の龍之介

小道 周帆

龍之介は自死を決意し、『或阿呆の一生』を書き上げた。昭和二年六月二十日の夜、彼特有のシニカルな表情ではあったが、どことなく満足気であった。これで母のような狂死から逃れられたとの安心感もあった。正しく不幸な幸福の中にいるとの思いだった。

最終章は「五十一 敗北」としたが、それは龍之介の人生での敗北を意味しているものの、作家としては敗北していないという宣言のつもりであった。

つまり、「彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。(中略)彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら」と書いたのだ。

これは睡眠薬ヴェロナールが切れた時の様子を表してみたが、同時にそんな酷い状況の中でもペンを執り、龍之介ならでの「懷疑主義」「理論主義」そして「芸術至上主義」と、芥川文学を貫いてきたとの自負心が書かせたものである。

「四十四 死」「四十八 死」と、おどおどしい章が続いたが、龍之介は明るいものを感じていた。死への方法がおおよそ定まったと思っただからだ。

即ち、

「四十四 死」では、「試みに縊死を計ってみると、苦しみを感じた時間が一分二十秒かだったのを発見した」と記述した。

その苦しみの時間は長くもあり、短くもあるが、いずれにせよ苦しむことになる。しかし、今までの人生では幾多の苦汁を嘗め尽くしてきただけに、死に際にまで苦しむのは一秒たりとも避けたいと思い、龍之介は縊死をあきらめた。

「四十八 死」は、「彼は彼女とは死ななかつた」「彼に彼女の持つてゐた青酸加里を一瓶渡し、これさえあればお互い力強いでせう」と書いておいた。

これには少し説明が必要かもしれない。秘書のような役割をしてくれた平松麻素子は妻 文の幼馴染で、文の信頼の厚い人物だ。いくら死を急ぐ龍之介とはいえ、麻素子との心中で遺族に哀しい思いはさせたくない。帝国ホテルに閉じ籠って作品を書いているときに、訪ねてきた麻素子に作品の関係で、自殺の方法を遊び半分で相談した際の話だ。

その時に麻素子から「青酸加里だと苦しまないでしょう」と言われたのだ。

それをヒントに龍之介は睡眠薬死に思い至った。だからこそ死への準備心を丈夫にし、そして籐椅子に座り、落ち着いた気持ちになったのだ。

死後、平松麻素子との関係を疑われたくないので、わざわざ「唯未だに彼女の体に指一つ触ってゐないことは彼には何か満足だった」と書き添えたのだ。文よ、解ってくれ！

客観的に自分を見つめ直す「一」から「五十一」までの小文を書いてきた数日間は、睡眠薬ヴェロナアルの世話にならなくとも眠れた。持病の胃痛もなかった。

この作品の前半には、意欲満々で、期待の新人として颯爽と登場するであろう二十歳の龍之介が居た。

書き出しの「一時代」では、本屋の書棚にかけられた梯子の上には有名な文豪の本があり、その領域に近づこうとしている自分がいる。そこから店員や客を見下ろしたとき、彼らが小さくみすぼらしく感じられ、自分はそうであってはならないとの思いから、

「人生は一行のポオドレエルにも若かない」を書き添えた。

人生は価値あるもの言われるが、龍之介にとっては、平凡な人生なんてポオドレエルの詩の一行すら劣るほど価値がないものになってしまふ。だからこそ、そんな人生を歩んではならないとの警句を発し、自分を奮い立たせた。本屋で目覚めた志を冒頭に何としても書いておきたかった。

夏目漱石先生に認められた喜びを素直に「十一夜明け」として書いた。

「彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。」

それは彼の二十五の年——先生に会った三月目だった」と。

そう、漱石山房に先生を訪ね、「木曜会」の出入りが認められ、いろいろと指導を受けた。

そして同人誌「新思潮」に『鼻』を発表したときには、漱石先生からお手紙を頂いた。そこには、

「大変面白いと思います。落ち着きがあつて、ふざけていなくって、自然そのものの可笑しみがおっとり出ている所に上品な趣があります。文章が要領を得てよくい整っています。敬服しました」とあつた。

仲間からはあまり評価されていなかったが、漱石先生のこの手紙で自信が

き、小説への取り組み姿勢が備わったのだ。ありがたい。

その後は苦しみながらも理性という「十九 人工の翼」を使い、芥川文学の完成を狙った。しかし、同時に崩壊していく自分自身を各章で見つめ、自己弁護をせずに、ありのままの生涯を五十一章に亘って書き終えたのだ。

後世で私を語るときには、人間芥川ではなくて、作家芥川龍之介の文学と芸術というテーマにしてもらいたいものだとの思いをこめ、満足気に頷いた。

うん、久米君にこの原稿を託す手紙を添えておこうと、再びペンを持った。そして、龍之介は皮肉な笑いを内に込めながら、

「僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したいと思っている」

「僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしている」

そうだ、久米君にもう一言添えておこう。

「ではさようなら」

そして最後に

「どうかこの原稿の中の僕の阿呆さ加減を笑ってくれ給え」 (注1)  
と書き添え、くさめを發した。(注2)

この文章を書きながら、龍之介はふとフランツ・カフカが親友であるマックス・ブロードに宛てて、

「『変身』『断食芸人』その他既発表の数編を残して、他の未定稿類は一切焼却してくれ」

と遺言したことを思い出した。

カフカの死後、ブロードはカフカの作品は二十世紀文学に影響を与えるものだ と確信して、遺稿を全て発表し、世界文学への紹介者となった。

恐らく久米正雄は、ブロードのように思うかどうかは判らないが、龍之介の遺稿はそれなりに注目されるだろうし、妻・文と愛児三人を残しての自死だけに、経済的な困窮を見るに見かねて、死後、即刻発表に踏み切るだろうと想定していた。

ここでも龍之介は、己のプライドから本心を書かず、カフカのような気持ちになつて書いた自分を、客観視して侮蔑の目で見ていた。

「遺書」とも言うべき作品が完成し、後は死へ向うのみである。死の準備は出来た。龍之介はただ「ぼんやりした不安」（注3）から死を決意したわけではなかった。確たる不安に襲われて数年前から自死を考えていた。天才といわれ、高見に立って下を馬鹿にすると思われていた龍之介であるが、常にこの不安が頭を過ぎっていた。

実母新原フクは厄年で龍之介を生んだ八ヶ月後に精神に異常を来した。それはフクが三十二歳のときである。龍之介はいま三十五歳、母の発病年齢を上回った。そのことが不安なのである。実母フキの病は突然にやってきただけに、龍之介にもその病魔が今にも襲ってくるのではないか、いや既にその兆候は出ているように思うのだ。

実母は発病から十年間、座敷牢のような部屋にいて青い顔で死を待っていただけであった。思えば哀れであった。

その母を思い、龍之介はこんな歌を詠んだ。

赤らへく 母の頬の面輪見まくほり

古江ぞ井でし河郎我は

（赤く光っていた母の頬の輪郭を見たいものだ。そう思って古い河から出てきた河童だ、自分は）

龍之介は人一倍自尊心の強い男である。文学者として名を成してきた。それだけに精神の異常を来たすわけにはいかない。哀れな死に方は避けねばならなかった。そう強く思っているにも拘らず、龍之介の視野のうちに妙なものが見えるのだ。妙なものは絶えずまわっている半透明の歯車だった。歯車は次第に数を殖やし、半ば龍之介の視野を塞いでしまう、が、それも長いことではない。暫らくすれば歯車は消え失せる代りに、今度は頭痛を感じはじめ。眼科の医者はこの錯覚を避ける為に度々龍之介に禁煙を命じた。しかしこう云う歯車は龍之介が煙草を親しまなかった二十歳前にも見えていたのだ。

龍之介の歯車への不安はいつも付き纏い、その心境や状況を『歯車』に書いた。

「そこへ半透明な歯車も一つずつ視野を遮りだした。僕はいよいよ最後の時の近づいたことに恐れながら、頸すじをまっ直ぐにして歩いて行った」

「三十分ばかりたった後、僕は僕の二階に仰向けになり、じっと目をつぶったまま、烈しい頭痛をこらえていた」

僕の様子がおかしいと思っただらしく、梯子段を慌ただしく昇って龍之介を見て妻の文は、突っ伏したまま、息切れをこらえ、肩を震わせていた。妻はやつと顔を擡げ、無理に微笑して、

「ただ何だかお父さんが死んでしまいそうな気がしたものですから。……」

龍之介自身もこんな恐ろしい経験をしたことはなかった。思わずつぶやいた。「もうこの先を書きつづける力を持っていない。誰か僕の眠っているうちにそつと絞め殺してくれるものはないか？」（注4）

龍之介がこの文章『歯車』を書いたのは、昭和二年四月二日、帝国ホテルにこもっていたときであった。秘書的な役割をしていた平松麻素子に頼んで低料金の部屋を特別に借りてもらい、集中的に原稿を書いた。いや、生活を考えれば書かざるを得なかったのだ。龍之介は名声とは裏腹に生活は追い詰められていた。帝国ホテルのベッドで龍之介は発作的に自死しようと試みたこともあったが、麻素子に止められ、文に連絡された。

そう、これが「四十八死」に心中事件のように書いた話だ。龍之介は、自殺願望がありながら、自殺が出来なかったことから、心中でも何でもよい、誰かに頼んで絞め殺して欲しいと思っていたのだ。そんな気持ちを『歯車』で正直に書いた。

最後は「僕の家に戻る決心をした。机の上に置いた鞆の中へ本や原稿を押しこみながら」と『歯車』の最終センテンスだ。要は死ねないのだ。

自殺できない龍之介の状況はこうだった。

実姉ヒサの夫 西川豊が事もあろうに一月六日に鉄道自殺をしたのだ。龍之介は自分の死を考えていた時だけに驚いた。よくぞ、鉄道自殺が出来たものだ、と一報を受けたときには一瞬そう思った。しかし、感心なんてしていられない。自殺の原因が姉の家の火災に絡んで、義兄に放火の嫌疑が掛かったからであった。どうやら義兄は多額の借金があるらしい。

龍之介にはそれだけでなく、多くの扶養家族がいる。しかし、ただ一度だつてそれが迷惑だとは龍之介は考えていなかった。実母フクの死の翌年、十一歳の時にフクの兄 芥川道章の芥川家に養子に来て以来、その覚悟は出来ていた。芥川家の長男として、養父母の扶養は当然として、実母フクが精神病で患って以来龍之介を実質的に育ててくれた叔母（実母フクの姉）のフキ、実家の父新原敏之、そして実姉ヒサの前夫との間の子 葛巻義敏を預かっていた。

西川の死によりヒサとその子二人が新たに扶養家族として加わる。もちろん龍之介の妻と三人の子どももいる。数えてみれば十二人の扶養家族がいることになる。その経済的支柱は龍之介の書く作品なのだ。

生存の意味を考え、死に直面しながら、龍之介は生きざるを得なかった、小説を書かざるを得なかった。これがこの六ヶ月の龍之介だった。その間に書いた作品は、死の床にいる画家堀越玄鶴を描いた『玄鶴山房』であり、精神病院の患者に仕立てた寓意小説『河童』、喘ぎ喘ぎながら書いた自信作『蜃気楼』、そして精神の狂いのプロセスを描いた『齒車』なのである。

龍之介は、ランプで照らし出される薄明るさの中で、つい二ヶ月前の帝国ホテルでのことを懐かしそうに思い浮かべていた。生きるために、死を考えて書いていた自分が滑稽ではあるものの、書くエネルギーとはそんなものかもしれないと思うのだ。この四編の原稿料で彼らは当面生きていけるだろうという安堵感もある。今は、この遺書的作品を書き終えたことで、全く空虚な龍之介になっただけだった。

しかし、また新たなことが龍之介の頭に浮かび上がってきた。それは家族の経済的なことを考えたことから連鎖して出てきたのである。あるいは意識していないつもりでも、このことが龍之介の死を願望する潜在的な要因なのかもしれない。芸術至上主義の完成と崩壊、精神病のこと、身体の衰弱と疲労感、そして扶養家族との決別、といったことの他に、まだ自殺願望の要因があったのか、と自問した。

その要因は解っているような気がしている。だが、このことは作家として文章に残すことはすまい。作家芥川龍之介のプライドとしてそれは絶対に出来ない。今、この時なら、思うことを書くのではなく、何の言辞も残らない吐露することなら出来るが…。

### 【龍之介の吐露】

若い時とはいえ、恥ずかしい限りだ。文と結婚した大正七年二月から僅か一年四ヶ月後に秀しげ子と出会った。妻の文はおとなしい女で子どもを生み、育てる才はあるが、作家の妻として表に出ることは嫌がった。また作品についての関心も薄かった。俺自身が文をそのように扱ったことにも由るのだと思う。大正八年六月十日、新進文士の集まり「十日会」に女性が出ているとは思わなかった。女流歌人だと知り、驚いた。

「あら、芥川さん・・・一度、お目にかかりたいと思っていましたのよ」  
そう秀しげ子に挨拶され、文学を理解するこの女に異常なくらい惹かれてしまった。遅筆の作家といわれている俺が、翌日には、しげ子に手紙と創作集を送ったのだから、我ながら呆れてしまう。その上、『餓鬼窟日録』に度々登場させ、遂には「愁人」という名まで付けてしまった。

今では嫌な思い出であるが、大正八年十月十五日、二台の人力車に分乗して深川・富岡門前の待合「真砂」に時間をずらして着いた。十畳ほどの部屋に通され、風呂に入って戻ってくると、もう布団が敷かれていた(注5)。しげ子が激しく詰め寄ってくる様子に、俺は若かったこともあつて歓喜した。しかし暫らくして、その動物的本能に圧倒され、驚かされ、やがては恐怖となつてしまった。

愁いを帯びた歌人と思つていたから「愁人」と呼んでいたのに、「これはなんだ」、とてもじゃないが、しげ子の攻めに、もはや俺は対応できなくなつてしまった。この【たった一度だけの情交】ですら、悔いが残つた。

書き上げた『或阿呆一生』の「二十一 狂人の娘」でしげ子への憎悪感を示しておいた。

「彼はこの狂人の娘に、——動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪を感じてみた」と。

それだけでは終わらなかつた。そこがこの女の恐ろしいところだ。

しげ子は大正十年一月に男児を出産した。そのときに

「貴方に似ている」

と言われたのには小心者の俺は震え上つた。この後もしげ子は俺に付きまゝつてきた。この様子は『河童』で雌河童が雄河童を遮二無二追いかけるシーンに使つた。以来、ことあるごとに【たった一度だけの情交】を強調せざるを得なかつた。

今も言つておきたい。しげ子とは大正八年十月十五日に【たった一度だけの情交】であつたのは間違いない。大正十年一月生まれの男児とは何の関係もないと。

あれから七年か。俺が有名になればなるほど、奴は俺を困らせる手立てを考へていることだろう。しげ子を忘れたい。しげ子から解き放されたい。しげ子とは【たった一度だけ】だ。

一人龍之介はブツブツ言い続けていた。

しげ子の復讐を龍之介は本心から恐れていた。しげ子は高利貸しの父と芸者上がりの母の間に生まれ、帝国劇場の電気技師をしている夫・秀文逸と大正元年に結婚し、同三年には長男・不二彦を出産していた。そして大正七年頃から短歌雑誌にしげ子の歌が掲載されるようになり、文壇関係者の会合に顔を出し、龍之介と出会ったのだ。一度とはいえ不義密通の事実を認めざるを得なかった。そんな背景があるため、龍之介はしげ子の夫から姦通罪で告訴されることに悩んでいた。

現に、北原白秋は別居中の隣家夫人・松下俊子と恋におち、夫から姦通罪により告訴され、未決監に拘留された。後に和解が成立して告訴は取り下げられたが、人気詩人白秋の名声はスキャンダルによって地に墮ちた。

大正十二年には、有島武郎は婦人公論記者で人妻であった波多野秋子と知り合い、恋愛感情を抱くが、秋子の夫に知られるところとなり、脅迫を受けて苦しみ、六月九日、二人は軽井沢の別荘（浄月荘）で縊死心中を遂げた。

龍之介は白秋のように入獄するなんて不様なことには耐えられない。有島の方はお互いが愛していたから心中が出来たのだろうが、龍之介はしげ子を今や全く愛していない。しげ子の夫が訴えたら龍之介はどう身を処することができるのか。一人で自殺するほかはないだろう。

間もなく、龍之介が最後に放った小さな輝きの六月二十日が静かに終える。

あと一ヶ月くらいが生きる限界のように思えた。どんな死に方が芸術的なのかを考えてみた。「縊死」はとてもじゃないが醜い。龍之介の好んだ己の鋭い目が眼球ごと飛び出すということに嫌悪感を持った。ならば、龍之介を認めてくれた漱石先生の『こころ』に登場する「K」は、「ナイフで頸動脈を切つて一息に死んでしまった」とあるが、余程の強い意志がないと出来ないのではないか。

龍之介なら手が震え、頸動脈を切ることが出来ないように思えた。では、『こころ』に登場する「先生」のように鎌倉の海での溺死はどうか。龍之介は水泳が得意であり、海では目的を達するように思えなかった。ビルディングの上から降りるのも矢張り見苦しいに相違ない。（注6）

そこで龍之介は薬品を用いて死ぬことにしたものの、青酸加里では断末での



苦しきは縊死以上だと思う。ただ美的嫌悪は与えないことと、蘇生する危険はないという利点がある。問題はこの薬品を求めることが容易でないことだ。しかし待てよ、手元には常用している不眠症治療薬があるではないか。睡眠薬ベロナルやジャーナルなら一ヶ月も掛ければかなりの量が集められる。これだ、睡眠薬で決するのだ。

ようやく龍之介は己の人生の閉じる方法が決まり安堵した。静かに眠れる様な気がして、床に入った。昭和二年六月二十日の深夜であった。

「なるほど芥川だ。死に臨んで生涯を顧みた作品として仕上がっている」と友人たちは評価してくれるに違いないと思い、満足している己の夢を見た。

完

7264文字

#### (筆者注)

- ・ 本作品は芥川 の 作品 を 始め、 いろいろ な 研究 書 を 参考 に して いる が、 龍之介 の 発 する 言 葉 や 思 い は 筆 者 の 想 像 や 推 測 に よ る フ ィ ク シ ョ ン で あ る。
- ・ 昭和二年六月二十日から一ヶ月後、昭和二年七月二十四日未明に自殺。
- ・ 『或阿呆の一生』は龍之介の自殺後に原稿が見つかったもので、雑誌『改造』の昭和二年十月号に掲載された。

・ なお、七月七日には『西方の人』、七月二十三日には絶筆となる『続西方の人』を脱稿している。

(注1) 『或阿呆の一生』の書き出しに久米正雄君に宛てた手紙が付いている。また、遺書である『或友人へ送る手記』に「僕は将来に対するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の『或阿呆の一生』の中に大体は尽くしているつもりである。」と書いている。

(注2) 芥川龍之介は「くさめ」を好んで描写した。

・ 『芋粥』…五位は慌てて、鼻をおさへると同時に銀(しろがね)の提に向つて大きな嚏(くさめ)をした。

・ 『羅生門』…下人は、大きな嚏(くさめ)をして、それから、大儀(たいぎ)そうに立上った。

・ 『鼻』…嚏(くさめ)をした拍子に手がふるえて、鼻を粥の中へ落した話は、当時京

都まで喧伝された。

(注3) 前述の『或友人へ送る手記』に自殺の動機として「少なくとも僕の場合はただぼんやりした不安である」と記している。

(注4) 死後発表された『歯車』の記載から。なお、この病気は精神病ではなく、眼病のようである。

(注5) 秀しげ子の出会いから情交に関しては、『芥川龍之介の愛した女性』高宮檀著を参考にした。

(注6) 自殺の方法に関する記述は『或旧友へ送る手紙』の芥川龍之介の死に際して書いた手記より